

ほんとに締るなら、それこそ頼むよ。

乾酪は臺所の物置のお棚に、

綺麗好きの、世帯持の、締め屋のお神さんだ。

ひとりでに轉けるまでうつちやつちやつてかまはない。

ほんとに締るなら、それこそ頼むよ。

俺がお父は

俺がお父はおつ死んだ。

何と云つてええだか、こちや知らぬ。

馬を六匹呉んさんし、サテ、

犁でもつて鋤けちふだ、追へちふだよ。

馬を六匹賣つ飛ばし、
牝牛を一匹、こちや買つてな、
一身上あんべと御機嫌だ。サテ、
何としてええだかまだ知らぬ。

そこで牝牛を賣つ飛ばし、
腓を一本、こちや買つてな、
一身上あんべと御機嫌だ。サテ、

極上肉を半ぺらまた失くす。

そこで腓を賣つ飛ばし、
牝猫を一匹こちや買つてな、
阿魔女の猫奴もうい奴ぢや。サテ、
煙突の隅つこにちよんと坐る。

またまた猫奴を賣つ飛ばし、

二十日鼠を、こちや買つてな、
尻尾つまんで火に投けた。サテ、
俺のお家がほうと燃えた。

朝のかすみ

朝のかすみと夕焼空は、
日和よいとの前しらせ、
曇る日ぐれと朝焼空は
寝まる羊をみな濡らす。

朝草苳り

朝草刈り

一

早はやも出でましよぞ、
朝草あさくさ刈がりに、ヨウ、
さまのお背せ戸どの
裏土うらど手てを。スイスイ。

二

曉あけの明みやう星じやうは
ちろりと出でやる、ヨウ、
出でやれ、下したん田だの
田たを鋤すきに。スイスイ。

三

あやめ紫むらさき

朝涼あさすず、小涼こすず、ヨウ、

お目めがさめてか、

まだ寝ねてか、スイスイ。

四

あやめ咲さく野の

朝涼あさすずなれば、ヨウ、

何も云いはずに、

思おもはずに、スイスイ。

五

見^みやれ、朝^{あさ}涼^{すず}、
野^の茨^{はら}の狭^さ霧^{ぎり}、ヨウ、
死^しのと誰^たが云^いうた、
昨^よ夜^べまでも、スイスイ。

六

はやも、ころころ、
啼^なくよにござる、ヨウ、
小^こ米^{こめ}がくれの
暮^{ひき}のころ、スイスイ。

七

何の島かよ、
瀬の瀬を越えて、ヨウ、
白い、空木の
花へ往た。スイスイ。

八

かはい草合歡、
まだ寝ねしてか、ヨウ、
お目がさめてか、
夜も明けた。スイスイ。

九

露つゆの小露こつゆの
ひめじそ見れば、ヨウ、
どこに入れやう
鎌かまも無い。スイスイ。

十

こぬか小雨こさめに
朝草刈あさくしれば、ヨウ、
濡ぬれたみそつちよが
飛とんで出る。スイスイ。

十一

啼^なけよ、みそつちよよ、
はや夜^よが明^あける、ヨウ、
さまのお瀬^せ戸^ども
いま開^{ひら}き。スイスイ。

十二

明^あけりや草刈^{くさ}り、
歌^{うた}はうと濡^ぬれよと、ヨウ、
いまは野^の茨^{あざ}の
花^{はな}ざかり。スイスイ。

十三

月の夜待の
かやつりぐさを、ヨウ、
雨の今朝見て
刈りいそぐ。スイスイ。

十四

暁の明星が
気がかりならば、ヨウ、
晝間刈らしやれ、
萎れぐさ。スイスイ。

十五

風の風ぐさ、
すずめのちやひき、ヨウ、
早^はやもほのほの、
なるこびえ。スイスイ。

十六

おまへ、ちごささ、
まだひめかやか、ヨウ、
わたしや紫^{むらさき}、
かもじぐさ。スイスイ。

十七

どうで、ひでりこ、
一雨ひとあめごされ、ヨウ、
思おもひますぐさ、
みこしがや。スイスイ。

十八

芒のぎで青あをいのは
忍しののころぐさか、ヨウ、
風かぜに尾おを振ふる
きつねがや。スイスイ。

十九

花はなで白しろいのは
稚ち子ご百ひゃく合り、野の百ひゃく合り、ヨウ、
咲さいて刈からるる
二にりん草そう。スイスイ。

二十

ちちこぐさかよ、
ははこのくさか、ヨウ、
山やまで戀こひしい
雉き子じのこゑ。スイスイ。

二十一

おまへ、何處の子、
背負籠つけて、ヨウ、
手には白百合、
露の鎌。スイスイ。

二十二

五月野中の
鳥の巢見たら、ヨウ、
露に卵が
啼き立てた。スイスイ。

初冬短曲抄

かやに

かやにかやの實^み、

椎^しにしひ、

ええ、さて、どんぐりの木にはどんぐり
てもさても、どんぐりの木にはどんぐり。

けやき

櫛^けひよろひよろ、

ばらばら、くぬぎ、

山^{やま}はからから、冬^{ふゆ}の風^{かぜ}。

ええそれ、山^{やま}はからから、冬^{ふゆ}のかぜ。

色の黄なのは

色の黄なのが女郎花、

さて、しろいのは男郎花、

ええ、それ、さりとは誰がきめた。

ええ、それ、さりとは何時きめた。

しよんがへ。

萱は

萱は枯れても

陽はかけつても

せめて、龍膽の花なりと、

ええ、それ、せめて龍膽の花なりと。

薄は

薄は薄

蘆は蘆

冬の風なりや音も立てましょ、

ええ、それ、冬の風なりや音も立てましょ。

松の生木で

松の生木で、生木で、

そぎつばなしたおもちやの小雉子、

物は云はねど、

父者戀しや、

母者戀しや。

薄陽の旅

からまつは

からまつは、

風も無いのに、

つい、ほろり、

ほろり、はらはら、

風もないのに、ほろり、はらはら、おもしろや。

甘樂の秋

1

畔のさいかち目に枯れがれて、ヨウ、
今朝は雀もちりぢりと、
秋も末なりや、わが世も末よ、
見れば妙義も早や霽かよ、
ええ、サテ、早や霽かよ。なあ。

2

桑の中道俣で行けば、ヨウ、
赤い夕陽がちらちらと、
秋も末なら、わが身も末よ、
遠い端山は早や時雨かよ、
ええ、サテ、早や時雨かよ。なあ。

桑の薄陽

上州富岡郊外

1

桑の枯葉に
夕陽が弱る。
急きやれ、遠百舌、
冬の百舌。

2

薄陽、桑畑、
何處まで行くぞ、
冬はからから、
空ぐるま。

桑くはの中なか道みち、
果はなき野の道みち、
桑くはの根ねばかり
見みりや泣なける。

3

桑くはの枯か葉はが
また音おと立たてる、
遠とほい薄うす陽ひが
また明ある。

4

5

未だ刈らぬに、
すがれ穂、晩稻、
風は北風、
破れ案山子。

6

咲かずじまひか、
早や枯れ枯れか、
いつも薄陽の
小豆菊。

土手のさいかち、
雲か、風か、
飛べよ、薄陽の
みそささい。

竹と棕櫚とは
わびしいものよ、
柿ののこり陽
ただ赤い。

蛹捨場の
裏溝づたひ、
何處へ行きましょ。
陽が低い。

9

冬の穢多村
枯桑ばかり。
背戸に薄陽の
斑ばかり。

10

崖の釣橋、
河原の薄陽、
風の枯桑、
見りや遠い。

11

遠い山脈
早や雪つけた。
霜の枯桑
陽も落ちた。

12

雲の影見て
夕汽車待てば、
何處か寒かぜ、
旅のかぜ。

13

雲さむさむ、
端山の薄陽、
北の小驛の
宵燈。

14

15

桑くわの畑はたけに

お月つきさま紅あかい、

なまじ、在所ざいしょの

遠狭霧とほさぎり。

笹の葉明り

上州富岡某氏別荘

1

よそのお庭にわの

笹ささの葉は明あり、

まだも、ちらちら身みに添そはぬ。

2

聊^なれぬお庭^{にわ}の
笹^{ささ}の葉^は明^あり、
何^{なに}かかけれど、身^みに染^しまぬ。

3

旅^{たび}の日暮^{ひぐさ}は
ひもじいものよ。
笹^{ささ}の葉^はすれも、よその笹^{ささ}。

4

寂しがりましよ、
笹の葉明り、
馴れぬほどこそ、身も憂けれ。

時雨日和

磯部行

1

時雨日和か、
狭霧がかかる。
溪の銚杉、
薄紅葉。

2

一の宮かよ、
権現さまか、
時雨日和の
片陽射し。

3

人も通らね、
もみぢの深さ、
たまにはらはら、
舞ふばかり。

4

紅葉はらはら、
山かけ、日かけ、
何の鳥かよ、
きよきよと啼く。

5

水の音聴きや、
わびしうて、寒むて、
紅葉照る坂、
またのほる。

誰か通るか、
向ふの山に
こなた行く影
また映る。

6

時雨日和の
山の端もみぢ、
旅は道づれ、
笠ふたつ。

7

磯部、湯どころ、
紅葉の雨に
日がな日ねもす
湯のけぶり。

誰かるやるか、
唐黍がらか、
背戸にからから、
冬のかぜ。

風のさいかち、
半は枯れて、
茨が鳴ります、
日の暮は。

10

248

ふくら雀よ
ふくれてくれな、
どうせ時雨れりや
冬の雨。

11

249

小諸

1

千曲川かよ、
小諸の城か
松に松風、
旗すすき。

2

城の日蔭の
唐黍風が、
紅い垂毛を
また見せる。

火の見櫓に
夕陽が焼けて、
小諸わびしや、
黍のかぜ、

3

笛や、喇叭で、
曲馬の燈、
城へ這入れば、
松の風。

4

城の松風
夜は夜で濕る。
一人旅なりや
氣も滅入る。

5

黍の赤い毛を
見ながら食べて、
旅の朝飯、
朝とろろ。

6

雀の頭巾

日の暮

1

枯れがれの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと
遠し日の暮の風

日の暮は、

ほつりとまつて、雀すずめがいち羽、

何なんの木きに、

木きではござらぬ、唐黍たうきびがらに、

風かぜはひようひよう、みぞれ風かぜ。

2

ほつほつと雀飛び出る薄の穂日暮まぢかにな
がめてゐれば

ほつほつと、

雀飛び出る枯穂の薄

日の暮に、

閑ぢやござらぬ、釣棹肩に、

影もひようひよう、土手の下。

時雨に月

1

入りいそぐ時雨の船か蘆の外にまだはみ出し
て梶大いなる

泊^{とまり}りいそぐか、
時^{しぐれ}雨の船^{ふね}か、

梶^{かぢ}だけは

まだもはみ出^でて、蘆^{あし}の外^{そと}。

ええ、そのうしろ梶^{かぢ}とは、ヤレソレ、頼^{たよ}り無^なや。
ソレソレ、日^ひが暮^くれる。

風立ちて雁啼^{かり}きわたる横雲の今宵の月夜はる
かなるかも

せかせかと煙立てたり蘆間近く良夜の船か夕
炊^かぎする

泊り船かよ、
今宵の月か、

せかせかと

煙立てます、蘆がくれ。

ええ、その晚餐の支度が、ヤレソレ、頼り無や。
ソレソレ、雁が啼く。

破れ障子

1

山松の音のとわたる日の暮は夕焼の赤き空も
すべぞなき

山松の音のとわたる日の暮は障子早く閉めて
ひとり飯食ふ

赤い夕日か、
山松風か。

ひとり飯食ふ、破れ障子。

この暮に、

早やも閉めたが、ええそりや、無理かいなア。

折ふしにほうと飛び立つ羽根の音雀ぞと思へばほとほとさびしき

ほうと飛び立つ

雀の羽音。

ひとりかじかむ、破れ障子、

この春を、

まだも閉めたが、ええそりや、無理かいなア。

笹原雀

1

風が寒いか、

藪原雀、

吹かれ吹かれて、ちりぢりと。

ええさ、ちりぢり、はらはらと。

さアさ、何でもよいわいな。

雪がつもるか、

藪原雀、

即いつ、離れつ、はらはらと。

ええさ、はらはら、さらさらと。

さアさ、何でもよいわいな。

2

浮
かれ狐
(清元)

浮かれ狐

清元『喜撰』替歌

1

春の夜の

浮かれ狐に、ついかつがれて、

ヨウイヤサ コレワイナ

土手の酒宴、石まくら、

それも花見の、ヤンレ、浮かれ酒。

ヤアトコセ ヨウイヤサ

アリヤリヤ これわいな、

このなんでもせへ。

2

ほうとして、

夏の夜明に裾ひきからけ、

〽ヨウイヤサ 〽コレワイナ

行きつ戻りつ、狐面、

水田は慈姑の、ヤンレ、花ざかり、

〽ヤアトコセ 〽ヨウイヤサ

〽アリヤリヤ これわいな、

このなんでもせへ。

しよほしよほと、

忍ぶ戀路か、月の出前を、

〽ヨウイヤサ 〽コレワイナ

雨もふらぬに最合ひ傘、

狐のお女臈に、ヤンレ、だまされた。

マヤアトコセ
マヨウイヤサ
マアリヤリヤ
これわいな
このなんでもせへ。

4

戀しくば、
たづね来て見よ、
信田の森の

マヨウイヤサ
マコレワイナ
うらみ葛の葉、
もとの母
冬はこんこん、
ヤンレ、
笹の雪。
マヤアトコセ
マヨウイヤサ
マアリヤリヤ
これわいな、
このなんでもせへ。

ふくら雀

喜撰替唄

ふうとして、

ふくら雀すずめがむちやくちやくふくれ。

ㄟ ヨウイヤサ ㄟ コレワイナ

ええさ、腹はらが立つ、腹はらが立つ、

あぢよにもかぢよにも、ヤンレ、どもならぬ。

ㄟ ヤアトコセ ㄟ ヨウイヤサ

ㄟ アリヤリヤ、これわいな、

このなんでもせへ。

空は青雲

空は青雲

全國青年團民謠

空は青雲、わしらは若い、
岩に子鷹の仰ぐよだ。

さうださうだ、巢立ちの若鷹だ、
いまに風切る鷹の羽だ。

海ははるばる、わしらは若い、
波に快走船の揺れるよだ。

さうださうだ、南の風待だ、
いまに乗り越す波の穂だ。

古い國柄、わしらは若い、
山と川とは搖籠だ。

さうださうだ、生れの生へぬきだ、

いまにお國の後繼だ。

時はよい秋、わしらは若い、
若い日本の起つ秋だ。

さうださうだ、世界のしのめだ、
いまにかがやく朝焼だ。

何が辛かる、わしらは若い、

心だてなら玉のよだ。

さうださうだ、鋼鐵のひびくよだ、
地から噴き出す眞清水だ。

伸びろ、耐へろ、わしらは若い、
いづれ柱になる木だ。

さうださうだ、見てゐろ、これからだ、
いまにお國を背負ふ木だ。

卷末覚え書

この集にはこの二三年來の作に成る小唄と民謡とを主として收めた。またそれらの風體をもつた短詩短唱の類をも採り輯めた。感興のながれといふものはおもしろいものである。この中にはそれらの何れともつかぬものが可なりある。然し、成るのはおのづからのものであつて、いろいろの分類は鑑賞家にまかすべきものかとも思ふ。ただ、わたくしは各章についての覚え書を附加するだけにとどめたい。

青 雀

去秋の震災當時、わたくしは妻子とともに家の前の竹林に閑かな生活を續けた。「竹林幽居」はこの間のわたくしの消息を語るものである。「朝顔」「醉歌」もその前後のものであつた。「旅」はその春の旅から得た。これらはその形に於ては小唄風のものであるが、結局は詩である。かうしたものが可なりこの頃のわたくしのものにはある。境涯が一つであれば、おのづからに諸體に流通するものと見える。

かなかなの鳴くころ

「祭」は民謡體である。ただわたくし自身の生活から成つてゐる。「かなかな」は歌謡と云へば歌謡、詩と云へば詩、いづれでもよい。「蜂の子」はむしろ抒情小曲と云へやう。

茗荷の花

舊臘、感興に乗じて多くの民謡を作つた。その中にまたかうした小曲風のもものが交つて流れて來た。

胡桃の花

これらは少女たちの歌ひものとして作つた。頼まれたからである。

地震年

去秋の大地震は、この小田原地方が最も激しかった。箱根、根府川の山津浪の恐ろしさは格別であつたが、この裏山の水野尾道なども見るか

げもなく壊えてしまつた。これらの民謡の中で、「家はつぶされ」「田嶋」などは、その丘の道から萩窪の盆地を眺めたものである。

ざんざら真菰

昨年の早春、わたくしは潮來に旅した。さうして詩や短歌などが成つたが、これらの民謡も前後して出來た。

「沼の日暮」は詩といつしよに出來たので、純然たる民謡でも無い。その他は舊臘一氣に歌つてのけた。この中にも小唄風のものがある。

葦の葉

昨夏、印旛沼に遊んだ。友人の吉植庄亮君の郷里が本野村といふので

ある。青葙のそよぐ頃わたくしたち、歌つくるものの三四人が招かれて行つた。その夜、村の人たちが、わたくしたちの爲めに、笛を吹き、鉦をたたき、また鼓をうつた。さうして印旛囃子をきかしてくれたり、麥搗踊を見せてくれたりした。わたくしたちも踊の輪の中にはいつた。わたくしの麥搗踊の唄は、これらの人たちに、後で贈つたものである。今度この唄で踊つてくれるさうである。その他の民謡も今は彼らのものである。

沼邊の萩や葎や莎草の原は目のかぎりに青々と南風にそよいでゐた。この草原に印旛の若い娘や男たちが草刈りにはひると、雲雀のみしか彼等のかくれ場を知るまいと云ふ。母馬や仔馬も氣ままに放れる。

朝の出がけに出て山見れば

雲のかからぬ山はない
といふ唄を、彼らはよく歌ふ。

日中の風

ここには海と山を歌つたものを假りに集めた。「朝顔」は小唄風であるが、これは三味線樂として作曲してもらひたいものである。

牛曳き

幾分北國ぶりである。

「馬の額」は童謡として作つたが、民謡と見てもいい。淺間や碓氷のものは昨春の旅から材を得た。その中でも「山羊追ひ」は追分の古驛で見

たのである。

矢羽根麥

農村の小情である。

「けちな穂麥」「馬洗ひ」「忘れた花」などはその時をりの作であるが、他は舊臘外の民謡といつしよに成つた。これらはこの新年の「女性」に寄せたものである。

月とピエロオ

ピエロオのをかしみと、山猿のとぼけとがこの中にある。が、いづれも自分のどこにかうした氣もちもあるのであらう。後の方のはすつと

以前に作つたものである。「初冬短曲」と同じ頃である。

BAN-BAN

わたくしの郷里、筑後柳河の言葉で、その人情の幾分かを出して見たいと思つた。

甌すり唄は、酒屋に生れたわたくしとしては一度は歌つて見ようと思つてゐたものを、唄に見たものである。この頃は醸造法も進歩して、あの甌も權では練らないさうである。わたくしのをさない時は夜となくしののめとなく、調子を合せて練つてゐたあの甌すりの音が、何とも云はずなつかしいものであつた。みんな、ほのぼのとして唄をそるへてゐた。

綺麗好き

英國の童謡本から、「まさあ・ぐうす」を初めいろいろ抜いて、曾って譯して見たことがあつた。その中から、むしろ民謡であるものを二三、ここに取り入れて見た。外にいろいろ見たい人は既刊の「まさあ・ぐうす」か、新版の白秋童謡集第一巻を手にとつてほしい。

朝草刈り

大正十一年初夏の作である。葛飾の古刀根川あたりの土手、その他の草刈り娘を念頭に置いて作つた。で、葛飾風と云へる。

初冬短曲抄

十年十一月に、わたくしは百篇に近い民謡を作つた。(それらは民謡集「日本の笛」に載せてある)それは、この初冬短曲が機縁になつた。これらは近世風の小唄に通つてゐる。

薄陽の旅

十年の十月の末に、わたくしは上州の富岡に旅した。その記念である。「甘樂の秋」や「笹の葉明り」は小唄であるが、その他は民謡體の短詩である。或は歌や俳諧として歌ふべきものを民謡の體を以て遣つて見たものである。むしろ純然たる民謡では無い。むつかしいであらう。ただ、自然の觀照も民謡體でやれないことは無いと、これで思へて來た。

雀の頭巾

歌の境地を、三味線樂の歌ひものとすれば、どういふ風に現はすべきかを試みて見たものである。

浮かれ狐

曾って上州の富岡に行つた時、藝妓の踊り用として吾撰の替唄をいくつか戯れに作つた。その中の一つが「ふくら雀」である。「浮かれ狐」は小田原で、ある家の初午祭に踊りをやると云ふので、作つた。

空は青雲

この一篇は日本青年團の團歌として、依頼によつて作つたものである。かうしたものは常套的になり易いので、何とかして民謡體でやつて見た

いと思つた。これには山田耕作氏が作曲した。

あしの葉



刷印日 八廿月五年三十正大
行發日 十月六年三十正大

秋白原北者作著

者表代スルア社會資合

雄鐵原北者行發

地番九百町表區川石小市京東

專堀者刷印

地番八〇一町堅久區川石小市京東

定價 壹圓八拾錢

發行所

東京小石川
表町一〇九
會社資

ア
ル
ス

電話小石川三五七〇番
振替東京二四八八八番

北原白秋著

小唄あしの葉
民謡

定價 壹圓八拾錢
送料 拾參錢

北原白秋著

白秋詩集

全二卷

定價各冊貳圓八拾錢
送料各冊拾七錢

北原白秋著

詩歌の洗心雜話

定價 壹圓貳拾錢
送料 拾參錢

北原白秋著

抒情小詩 わすれなぐさ

定價 壹圓八拾錢
送料 拾參錢

北原白秋著

詩集 水墨集

定價 參圓五拾錢
送料 拾八錢

北原白秋著

小唄白秋小唄集

定價 壹圓八拾錢
送料 拾參錢

高倉輝著

我等いかに生く可きか

定價 壹圓貳拾錢
送料 拾壹錢

島崎藤村著

飯倉だより

定價 壹圓五拾錢
送料 拾參錢

三宅やす子著

婦人の立場から

定價 壹圓五拾錢
送料 拾壹錢

291

698

終

